

園児作「北斎画」 立派な屏風に

墨田の保育園 地元職人が仕立てる

江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の木版画「神奈川沖浪裏」を手本にして保育園児が描いたアクリル画が、墨田区の職人の手で立派な屏風に仕立てられた。作品は園児たちの目に触れるよう、4月に増築された園舎の入り口に飾られている。

北斎画を描いたのは、平成22年秋、同区亀沢の私立「墨田みどり保育園」で卒園を控えていた12人。1カ月間をかけて下絵を描き、アクリル絵の具で仕上げた。

同園がある地域は、約200年前に北斎が住んでいたことから、偉人にちなんで毎年5、6歳児が月3回、絵画制作に取り組んでいる。

手本にした「神奈川沖浪裏」は、1831（天保2）年ごろ出版された連作「富嶽三十六景」の一つ。荒れ狂う波と翻弄される船の向こうに富士山が描かれ、北斎の代表作として知られている。

園児たちは、富士山の代わりに、園舎から見えた建設中の東京スカイツリーを描いた。全員が大きな絵を描くのは初めてで「思うように描けずに涙、涙で描いた」（市川麻美園長）というほどの労作となった。

この作品が昨年、行事で同園を訪れた屏風職人、片岡恭一さん（57）の目にとまった。

片岡さんは、都内で唯一の屏風専門店を地元で経営。天に伸びるスカイツリーと波しぐさの豪快さにすっかり魅了され、屏風に仕立てたいと申し出た。

「力強い筆致で素晴らしい。うまく描こうと思っていないところがいい」

絵を預かり、工房で仕立てていると、来客から「この絵は、どこ

の作家さんの作品ですか」と褒められたこともたびたびだったという。

「屏風は奈良時代から歴史があり、風を防ぐという意味合いからなくてはならない調度品だった。園児の絵もたたむことができ、長持ちすることと思います」

完成した屏風は高さ120センチ、幅170センチ。紺色の絹の縁は、絵が引き立つようと片岡さんが選んだ。黒い木枠も、園児の絵に合わせた特注品だ。

贈呈式には絵を描いた卒園生も参加。区立小3年、江原美羽さん（8）は「きれいでうれしい。波のしぐさを描くのが難しかった」と懐かしそつに話した。



屏風を囲む卒園生らと片岡恭一さん
— 墨田みどり保育園